

# 藤原先生追悼

忘れ難き日々～藤原輝男先生

山口慎輔(元 JOFPA, FOT 会員・監事、現 HANDS 監事)

ギシギシと揺れを伴う音がして、プレハブの 2 階にあった宇部の事務所に大きな体の方が入ってこられた。「イヤ、どうも」とバリトンの張りのある声を聞いたのが、父と私が藤原先生にお会いした最初でした。公認会計士であった父に会計の相談があり、長年会員であった父に否やのあろう筈もなく、年に 1 回会計監査に訪れる先生にお目にかかることになりました。

国際的に大きな事をされている人とはどのような方だろうと、失礼にも多少の好奇心もありましたが、「きわめて普通の人」が第一印象でした。能弁というよりむしろ朴訥であり、謙虚な語り方が変わることはない確固たる信念に基づいてのことと分かったのは、チボリに同行させていただいた折でした。それは「きわめて特別な人」でした。先生についてはたくさんのもっと身近に時を共にされた方々があり、先生の高潔な人格や多くの輝かしい業績については、私の書けるところではありません。

「チボリと一緒に行ってほしい」との電話で状況も知らないままの同行でした。現地の山部のわずかな平坦地に、何時着くかも分からない私たちを村人を総出で迎えてくれる様子を、先生への敬意の大きさを見、その晴れやかさはとても私も受けられるところではないとグループの輪から離れ、写真を撮ったのですが、後日その写真を FOT(少数民族里親の会)の葉の表紙に使うことができました。

現地住民代表やスタッフとの討論会では、長老の 1 人から「子が親を尊敬しないようなら学校を元のトウモロコシ畑に返して」などの発言も出るなど、当時現地でくすぶっていたチボリ支援ミッション SCM 創設者レックス神父及びその支持者(主に長老や住民)と、教師を含む教育を受けたチボリの青年たちとの対立を背景にした激しい議論が続きました。右往左往する私たちは、人間だから所詮そんなものだとしたり顔をしたり、かく在るべきだと、わけも無く正義感ぶってみたりの中で、先生は泰然自若とされていました。もっと指導なり、教え諭されてはと内心思うところでした。柔和な微笑を持って訴えのすべてを聞き、「そうですか、そうですか」と頷きつつ簡単な感想を述べられておられました。

ある夜、寝る前ふとつぶやくように言われました。「あの人たちのことは、例え一時、間違っただとしても、それも含めあの人たちが決めねばならないことです」。極言すれば、先生が言われれば殆ど受け入れられる状況の中での沈黙でした。また後日「神父は私の親友です。私たちは互いに信じあっています」。先生の大きな体躯の中を貫いているのは理屈や道理でなく、潔い正義でした。それらが、ゆるぎない確固たる信念の人として、私が尊敬する藤原先生であります。私は先生に導かれ会に入れて頂きました。それゆえに先生についてゆくところです。

成田空港に遅く着き、ホテルで食事をご一緒した後部屋に分かれました。翌朝隠し事を告げる子どものような小さな声で、あの後町に出てお酒を飲んできましたとすまなさそうに話されました。一つの仕事をやり終え帰り着いた安堵感をいっぱい杯に満たされたのでしょうか、と同時に私にまで気遣いをされる大きな体の細やかな心配りに感謝しつつ、私の生涯初めて自らの下戸を悔やんだものでした。

藤原先生、先生の導きで私は多くのことを教えて頂きました。「幸せとは何か」「学ぶとは何か」「信じるとは何か」「なぜ私があるのか」等々質問と解の提示がありました。何一つ明確に答えられるものは無く、まして身についたものではありません。どうか今後もより善き導きをお願いします。私よりはるかに大きなお体の藤原先生が私の小さな心の中に生き続けられることを私の命の限り忘れはしません。先に身罷った父ともお話いただければ幸甚です。いずれまたお会いいたします。

